
食事をしながら

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食事をしながら

【Nコード】

N4191V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

フランス革命の中を生きた二人の怪物タレーランとフーシェ。その二人が食事をしながら話すことは。フランス革命においてこの二人はナポレオンやロベスピエール以上に恐ろしい人物だったかも知れません。

第一章

食事をしながら

フランス革命はこう言われている。

多くの革命家と一人の独裁者、一人の英雄、そして二人の怪物を生み出したとだ。

問題は二人の怪物だ。彼等である。

タレーランとフーシェ。激動の時代を生き抜いただけでなく多くの謀略の中にその身を置きそのうえでだ。ナポレオンの両輪となり支えもしてきた。

しかしだ。彼等はだ。

最後にナポレオンを裏切り彼を失脚させた。そのうえで一連の戦争による責任をナポレオンに押し付けてだ。フランスを救いもした。

しかしだ。誰もがだつた。

彼等に対してはだ。いいものを見ていなかった。

「タレーランは汚物だ。絹の靴下の中のだ」

「フーシェには何時寝首をかかれるかわからない」

「タレーランを信頼すると身代わりにされる」

「フーシェは生き残る為なら悪魔でも騙す」

こう言われてきた。とかく評判が悪い彼等だつた。

その行い自体もだ。とにかく人に嫌われるものだつた。

「タレーランは賄賂を取る」

「しかも他人の女房まで取る」

これが実際のことであつた。事実なのだ。

「フーシェは人を殺すことを厭わない」

「革命でどれだけ無実の者をギロチンに送つた」

こうしたことを言われてきた。そしてだ。

「上司にも部下にも同僚にも友人にも持ちたくない」

「あの二人には近寄るべきではない」

「ナポレオンですらあの二人には騙された」

「そもそも忠誠心なぞ最初から心がないのだ」

「まさに怪物だ」

人間ではないと言われていたのだ。そうした彼等だった。

しかもだ。御互いにであった。彼等はだ。

政敵同士であった。それもかなり対立している。

タレーランはだ。こう言うのだった。

「フーシエの代わりはフーシエしかない」

思いきり皮肉を込めての言葉だった。

「彼しかな」

そしてだ。フーシエも言うのであった。

「タレーランの為の監獄は常に用意してある」

そしてだ。こう言い加えた。

「ギロチンの刃も常に磨いている」

御互いにこう言い合っていた。政敵同士でもあったのだ。

しかしその彼等がナポレオンを失脚させフランスを救った。それ

は紛れもない事実であった。

それでも誰もだ。彼等を賞賛しはしなかった。むしろこう言う始

末だった。

「ナポレオンを騙し失脚させてか」

「そのうえで彼を一方的に悪人にしてだ」

「自分達は助かるか」

「何という奴等だ」

結局のところこうした評価であった。彼等は何処までも悪人と見られていた。

だが彼等自身はというのだ。そうした視線や評価にだ。

全く動じていなかった。平然とさえしていた。それが周りの評価をさらに悪くさせていた。

ある日だ。その彼等が偶然会った。そして時間もあった。

ふとだ。タレーランの方から言うのだった。

「思うのだが」

「何だ」

フーシエは不機嫌そうな顔でタレーランに言葉を返した。

「何か用でもあるのか」

「あるから声をかけたのだ」

タレーランは表情を消してフーシエに告げた。

タレーランは恰幅のいい顔である。片足を引き摺っている。髪も貴族的だ。フーシエは痩せて抜け目のなさそうな顔をしている。だがタレーランの服は立派でフーシエは質素だ。

その彼等がお互いを見据えてだ。話をするのだった。

「違うか」

「そうだな。その通りだな」

フーシエもその言葉に頷きはした。

「だから声をかけたな」

「その通りだ。そしてだ」

「そして？」

「私はどうやら腹が空いている」

タレーランからの言葉だ。

「君はどうか」

「空いていると言えばどうするのだ？」

フーシエはタレーランのその目を見ながら尋ね返した。

「そうであれば」

「どうだろうか。共に」

タレーランはまたフーシエに話した。

第二章

「共にどうだ」

「そうだな。丁度その時間だ」

「食事の時間だな」

「貴殿との食事なぞ気が進みはしない」

フーシエはその不機嫌な顔で述べた。

「だが」

「だが、だな」

「それも一興か」

フーシエは静かに述べた。

「貴殿と。たまに食べるのもな」

「そう言うのだな」

「いいだろう。それではだ」

「行こう。いい店を知っている」

タレーランはにこりともせずフーシエに告げた。

「そこで美食を楽しもう」

「美食をか」

「美酒もある」

それもだというのだ。

「どうだ？たまには」

「不幸なことに今私には時間がある」6

これがフーシエの返事だった。

「全く。これも何かの縁だな」

「そうだろうな。それではだ」

「今からだな」

「そうだ。では行くとするか」

こうしてだ。二人はタレーランの案内でその店に入った。そこはまるで革命前になったかの如き豪華な外観と内装のレストランであ

った。

天井も床も壁も見事であり輝かんばかりだ。装飾もカーテンも椅子やテーブルもだ。さながら貴族の宮殿の如くである。その中でだ。彼等は店の奥、個室に案内された。そこには一つのテーブル、そして二つの椅子があった。その他の席は存在しなかった。

その部屋に案内されてだ。唯一の席に向かい合って座る。すぐに料理が一度に運ばれてきた。その中にはだ。あの魚もあった。

大きな平目である。それが焼かれて出て来た。それを見てだ。

フーシエはだ。いささかシニカルな顔になって自身の向かい側にいるタレーランに話した。

「好きだな、相変わらず」

「平目だけではないがな」

「あの話は知っている」

フーシエはシニカルなままでもうタレーランに述べた。

「二匹の平目だな」

「その話をするか」

「まず一匹目をわざと落とした」

「そしてだな」

「そのうえでもう一匹を出す」

そうするというのである。

「落胆した客人達をそれで喜ばせさらに美味に感じさせるのだったな」

「懐かしい話だな」

「確かにな。しかし今日は一匹だけか」

「同じ手を使うのは無粋だ」

こう返すタレーランだった。しかも平然としてだ。

「そうしたことはしない」

「だから今日は一匹だけか」

「その通りだ。ところでだ」

「ところで。何だ」

「この店はどうだろうか」

こうだ、フーシエに対して問うのだった。

「気に入ってもらえただろうか」

「貴族的だな」

フーシエは顔を動かさなかった。その小さな目で周囲を瞬く間に見回してそれからだった。タレーランに対してこう答えてみせたのである。

「革命の敵だ」

「それが感想だな、貴殿の」

「如何にも。この店を経営している者もシェフもだ」

フーシエはタレーランを見据えながらそういった者達の名前を挙げていく。

「よく通っている客も全てだ」

「どうだというのだ？」

「処刑する必要があるな」

処刑、フーシエが出した言葉はこれであった。

「革命の敵だ。全てな」

「では私もというのだな」

「監獄は既に用意してある」

彼が常に言ってきた言葉をだ。その当人に話すのであった。

第三章

「どうだ？ギロチンの刃も磨かれているぞ」

「生憎だがそこに行くのはだ」

「誰だというのだ？」

「ロベスピエールは多くの者をギロチン台に送った」

その革命の話だった。革命が生み出した独裁者だ。ジャコバン派を率い多くの者、国王夫妻はおるかかつての同志達までギロチン台に送ってきた。清廉潔白かつ苛烈な独裁者であった。

「しかし最後はだ」

「自分が送られたな」

「ギロチンの刃は公平だ」

今度はタレーランがシニカルに話した。

「誰であろうがその刃を見せる」

「では私もだというのか？」

フーシエはタレーランの言葉に言い返した。

「その刃に斬られるというのか」

「どうか。それは」

「生憎だが私は刃の行く先を常に見ている」

「常にか」

「だからそれはない」

こうだ。フーシエは今度は平然として話した。

今二人は食事を食べてはいない。その前の前哨戦という形だった。

「残念だったな」

「ふむ。それは私も同じだ」

「見ているものは賄賂と美女だけではないのだな」

またシニカルなものを見せるフーシエだった。タレーランのその女性問題に賄賂を取るといふ話を彼自身に対してしてみせたのである。

「己の命も見ているか」

「貴殿は美女や財産には興味はないのか」
「ないな」

あつさりとだ。タレーランに対して答えてみせたのだった。

「妻と子供達さえいればだ」

「そうか。無欲だな」

「私は少なくとも貪欲ではない」

「貪欲か」

「誰かの様にな」

「それはいいことだ」

フーシエのそのことはよしとするのだった。しかしであった。タレーランはまた言ってみせた。あくまで引かない。

「多くの無実の者を義正にするのと同じだけな」

「あの街の粛清のことか」

「リヨンではどれだけ死んだか」

「一割程度だ」

フーシエは素っ気無く答えてみせた。

「ほんのな」

「二千人も死んだというが」

「その程度か」

まるで何でもないとといった様子でだ。フーシエは答えてみせた。

「何ということもないな」

「二千、多くはないか」

「少ないな」

やはりこう返すフーシエだった。

「革命ではどれだけ死んだか」

「そうだな。国王夫妻もな」

ここでまた言うタレーランだった。表情を変えずにだ。

「助かった筈だがな」

「運命だ」

フーシエはしれつとして述べた。

「自業自得と言っているいい」

「処刑されたのはか」

「そうだ、自業自得だ」

またこう言うフーシエだった。

「市民のことをないがしろにして贅を極め財政を破綻させたのだ。そうなくても自業自得でしかない」

「それが事実であればな」

「夫妻、とりわけ王妃の贅沢は偽りだというのか？」

「確かに贅沢だったのは事実だな」

「タレーランもそれは否定しなかった。」

「しかし財政破綻はそれが原因ではなかったな」

「そうだったかな」

「そう記憶しているがな」

「タレーランはだ。真実を話してフーシエを見据えていた。」

「国王はそれを何とかしようとしていたしな」

「結果が全てだ」

フーシエは政治の話をしてみせた。

第四章

「結果が伴わなければ同じだ」

「結果か」

「貴殿もそうではないか」

フーシエはまた反撃に出た。

平然としているタレーランに対してだ。こう言ってみせたのである。

「これまでどうした謀略を使った」

「謀略？」

「多くの者を陥れてきたのではないのか？」

「このことをだ。タレーランに言うのである。」

「違うのか？それは」

「さてな。何のことが」

「他国だけでなくフランスの中にも大勢いるな」

フーシエはタレーランのその謀略のことを指摘してみせた。ただ

し己の謀略のことはここでは言わない。自分のことはなのだ。

「貴殿が陥れた者は」

「具体的に挙げられるか、誰なのか」

「挙げるにはあまりにも多い」

これも事実だった。タレーランは稀代の謀略家として知られているのだ。

「何人ギロチン台に行ったのか。それにだ」

「それに？」

「あの男も騙したな」

タレーランのその平然とした顔を見据えての言葉だった。

「あのコルシカ生まれの男も」

「彼のことか」

「忘れたとは言わせないぞ」

「安心するのだ。覚えている」

タレーランは眉一つ動かさず言ってみせた。

「それはな」

「そうだな。何度も裏切り騙してきたな」

「目的があつたからだ」

「目的か」

「私は外交官だった」

ついでに言えば政治家でもある。

「ならばだ」

「フランスの為にだというのか？」

「そうだ。私は私の全てをフランスに捧げている」

そうだとするのである。

「この国にだ」

「それでいて賄賂を取るのか」

「依頼されるからだ」

様々な仕事をだ。その内容はあえて言わない。

「だから受けるのだ」

「賄賂をか」

「仕事に失敗すれば返す」

その賄賂をだというのだ。

「それに何か不都合があるのか？」

「色々な賄賂を受け取っていたな」

フーシエはタレーランに負けずに返す。

「どれだけの額がわからないな」

「それを知っているのか」

「色々調べさせてもらった」

フーシエの得意技だ。彼は他者、とりわけ政敵の情報を手に入れそれを活用することが得意なのだ。それは芸術の域にまで達していた。

「随分な額だし汚いことをしていたな」

「さてな」

「あの男の話に戻すが」

二人の頭の中にその男の顔が浮かんだ。英雄と呼ばれた男だ。

「あの男を売る様なことをしてきたな、他国に」

「私は彼を評価しているのだが、今も」

「評価している相手を売るのが」

「フランスの為ならばな」

それならばだというのである。

「そうするだけだ」

「フランス皇帝であつてもか」

「彼の為にフランスがあるのではない」

あまりにもだ。冷徹な言葉だった。それを平然と言うのである。

「フランスの為にだ。彼があるのだ」

「だから必要ならばか」

「彼に役に立つてもらっただけだ」

「役にか」

「そうだ。それにだ」

ここでタレーランから話した。

第五章

「貴殿は私を謀略家だと言ったが」

「その通りではないのか？」

「彼は私など比べものにならない謀略家だった」

「そうだとするのである。」

「その彼の謀略は知らないのか」

「知ってはいる」

「フーシエもそのことは認めた。不都合ではないからだ。」

「しかも冷酷だった」

「そうだな。多くの兵が彼により失われた」

「それはその通りだがな」

「ではだ。私とて必要からそうしたまでだ」

「謀略を使ったというのか」

「必要でなければ使いはしない」

「タレーランは落ち着き払って述べた。」

「それだけだ」

「ではだ」

「今度は何だ」

「貴殿は何人の愛人がいた」

「今度問うのはこのことだった。」

「それはわかっているか」

「さて」

その問いにはとぼけてみせるタレーランだった。

「何のことか」

「ドラクロワ夫人は何だ？」

「フーシエはタレーランに対して問うてみせた。」

「その他には何人いたのか」

「私は誰に対しても紳士だ」

タレーランはそのことは自負と共に述べた。

「女性であつてもな」

「無理強いほしくないというのだな」

「彼女達が私を愛してくれたのだ」

「それは今もだな」

「それだけだ。私は何も悪事はしていない」

少なくとも無体なことはしていないというのである。

「女性に対してはとりわけ紳士的なのだ」

「しかし子供はいるな」

「さてな」

そのことにもとぼけてみせるのであつた。

「数えていない」

「女なら誰でもいいのが貴殿だな」

「美しければだ」

「それなら誰でもいいか」

「何か不都合があるというのかな、それで」

「よくもまあ平気でいられるものだ」

フーシエはまたしてもシニカルに言ってみせた。

「何人も愛人を持ち。隠し子をもうけてそれで」

「かつては普通だった」

悪びれずに返すタレーランだった。

「革命前はな」

「貴族達の間ではか」

「結婚なぞ所詮は家と家のつながりに過ぎない」

これは本当にそう考えられていた。貴族達の間では結婚はいわば仕事の一つだったのだ。それで愛人を持つことも当然のことだったのだ。

「それでどうして不都合がある」

「そう言うのか」

「そうだ。私は貴族社会の中でそうしていただけだ」

何の臆面もなくだ。タレーランは言い切ってみせる。

「美食についてもそうだ」

「賄賂もか」

「そうだ。それだけだ」

「革命に対する罪だな」

フーシェの言葉にだ。剣呑なものが宿った。

第六章

「それだけで充分にだ」

「監獄にといいのだな」

「常に用意している。今もだ」

その剣呑なものをさらに強くさせてタレーランに告げる。

「確かな証拠以外の何者でもないな」

「革命に対する罪か」

その言葉にであった。

タレーランは反撃の機会を見た。そのうえで言い返すのであった。

「それは貴殿もだな」

「私もだというのか」

「貴殿は多くの仲間を売っていないだろうか」

「ジャコバン派のことか」

「最初はジロンド派だったな」

穏健的な共和主義の思想を持つ派閥だ。それに対してジャコバン

派は過激、急進的な共和主義者の集まりなのである。

「しかしジャコバン派になりジロンド派を粛清したな」

「あれはロベスピエールのしたことだ」

その独裁者に責任があるというのである。

「私はただの官僚だ」

「ロベスピエールだけであそこまでできたか」

タレーランはさらに指摘してみせる、

「果たしてな」

「さてな。彼は優れた人物だったからな」

それは否定できなかった。ロベスピエールもやはり優れた男だっ

たのだ。そうでなければ革命の中で独裁者になれはしない。

「サン＝ジユストもいたしな」

「つまり彼等に責任があるのか」

「また言うが私はただの官僚だ」

「こう言い切るフーシェだった。」

「道具に過ぎない」

「道具がかつての同志ジロンド派はおるかジャコバン派の多くもギロチンに送り」

ジャコバン派は互いに殺し合ってもきた。ロベスピエール、フーシェが言うには彼が多く同志達を粛清してきたのである。それも事実だ。

「尚且つロベスピエールもギロチン台に送ったのだな」

「運命だな」

「運命によつてか。彼は滅んだのか」

「そうだ。それだけだ」

「こう言ってみせるフーシェだった。」

「私は何もしていない」

「革命に対する罪はあると思うが」

「知らないな。私は働いていただけだ」

「そしてだ。フーシェもこの言葉を出すのであった。」

「フランスの為にだ」

「働いていただけか」

「そうだ。少なくとも私がフランスにとって害になることをしたか」
「タレーランにだ。このことを問うのだった。」

「あれは言ってもらいたいものだな」

「ふむ。ないな」

「それについてはだ。タレーランも認めた。」

「貴殿が世に出てからだ。それは一度もない」

「私はフランスを裏切ることほしない」

「フーシェの断言はここでもだった。だがこの断言はこれまでよりも強いものだった。」

「何があるうともだ」

「フランスは絶対か」

「その通りだ。フランスは何を失った」

タレーランに対してだ。さらに問うてみせた。

「私によってだ。何を失った」

「多くの人命だ」

「革命の敵が粛清されただけだ」

「皇帝もか」

「あの男は自滅だ。それを言えばだ」

また反撃に転じたフーシェだった。タレーランをここでも見据えてだ。

こう言った。剣の言葉で。

「貴殿もまた。あの男をだったな」

「フランスの為だ」

タレーランもだ。全く悪びれない。

第七章

「フランスの為にだ。彼には自滅してもらった」

「全ての責任を背負ってだな」

「それでフランスの為に奉公してもらったのだ。彼も本望だろう」

「そうだといいがな」

「思えば多くの人命が奉公したな」

「そのタレーランによってである。」

「素晴らしいことだ。しかし私もだ」

「貴殿もか」

「フランスにとって害になることをした記憶はない」

彼もだ。また言い切ってみせたのだった。

「一切だ」

「言い切ったものだな」

「私が謀略を企んでいると言われていた時はだ」

その時はだ。どうかというのだ。

「常に共犯者がいるのだ」

「ほう、初耳だな」

フーシエはタレーランの今の言葉にだ。シニカルに返した。彼は

ここでもシニカルだった。しかもそのシニカルは確かな冷酷のある

シニカルだった。

「それはな」

「初耳というのか」

「そうだ。貴殿の様な人間に共犯者がいるのか」

「こう言うのである。」

「そんな者がいるのか」

「いる。それはだ」

「それは？誰だ」

「フランスだ」

臆面もなくだ。フーシェに対して言ってみせたタレーランだった。

「その場合は常にだ。フランスが共犯者だった」

「我等の祖国がか」

「そうだ。フランスが私の共犯者だった」

「こう言うのである。やはり平然としている。」

「それも常にだ」

「フランスか。それを言うならだ」

「貴殿もだというのだな？」

「人は私を常に裏切る男と言う」

この評価を否定する者はいない。彼以外には。

「そうな。しかしだ」

「一つだけは裏切っていないのだな」

「そうだ。私は常にある存在に絶対の忠誠を誓ってきた」

間違つてもだ。国王でもジロンド派でもジャコバン派でもない。

ましてやロベスピエールやナポレオンでもない。どの組織でも個人でもなかった。

では何なのか。それを話すのだった。

「フランスに対してだ」

「貴殿もそう言うのか」

「その通りだ。私はフランスは裏切らない」

また言う彼であった。

「何があるうともだ」

「例え誰を裏切り騙してもだな」

「フランスは裏切らない」

それは絶対だというのである。フーシェの今の言葉は揺るがない。

「誰を騙したとしてもだ」

「誰をもだな」

「そういうことだ。私はフランスを騙したことはない」

彼の祖国はというのだ。

「裏切ったこともない」

「ではだ」

フーシエの話がそこまで聞いてだ。そのうえでだった。

第八章

タレーランはだ。あらためてこう彼に話したのである。

「これからのことだが」

「これからか」

「フランスは今瀬戸際にある」

そのフランスについての話だった。

「ナポレオンは倒れた」

「そうだな。倒れたな」

自滅という。他ならぬ彼等が彼に対して何をしたか。そんなことはどうでもいいのだった。

「そして諸国はだ」

「フランスに群がろうとしている」

「このままでは多くの賠償金に領土を奪われる」

そのことは避けられないとだ。誰もが思っていた。何しろだ。

欧州を混乱の渦に巻き込んだのはそのフランスだ。それならばだ。賠償金に領土も当然のことだった。フランス人達は覚悟していたのだ。

しかしだ。タレーランはだった。

ここぞだ。フーシエにこう話したのである。

「フランスの領土を守り賠償金も支払わない」

「それが可能だと思うのか？」

「思うからこそ言っているのだ」

ここでもだ。平然と話すタレーランだった。

「まず私がいてだ」

「そして私もいるな」

「二人がいればできる」

フランスを守ることがだというのだ。

「まず責任の所在ははっきりしている」

「あの男だな」

「彼は素晴らしい。全ての責任を引き受けてくれた」
無理矢理押し付けたとは言わないのだった。

「彼は自分一人が悪人になつてくれたのだ」

「では。責任はあの男のせいにしてだ」

「そうだ。後はだ」

「騙す必要があるな」

フーシエはそのことを何とでもないように言ってみせた。

「まずは諸国だな」

「そして国民だ」

「フランス国民もだな」

「騙す。そしてそのうえでだ」

「フランスを救うか」

「フランスはそれを望んでいる」

その彼等が常に共犯者とし忠誠を誓ってきた祖国がだというのだ。
そう話してだ。彼等はだ。

同時にだった。互いにやりと笑った。そして言うのだった。

「ではだ。話は決まりだな」

「そうだな」

タレーランとフーシエは御互いに言い合う。

「フランスの為にだ」

「騙すでしょう」

「フランスはこれで救われる」

「そうだな。間違いなく」

二人で話してだ。それが全て終わってだった。

二人はだ。あらためてこんな話をした。

「では。食事にするか」

「そうだな。それではな」

こう話してだった。二人はだ。

話を終えて食事にかかった。その中でだ。

タレーランはだ。こうフーシエに尋ねた。

「どうだ、味は」

「見事だと聞きたいのか」

「そうだ。私が薦めたこの味はどうだ」

今尋ねるのはだ。このことだった。

「気に入ったか」

「薦める人間は気に入らない」

あえて名前を出さないがはっきり言ったのであった。

「しかしこれはフランスの味だな」

「その通りだ。フランスの味だ」

「ならば答えよう」

そのフランスの味についてだ。フーシエはどうかというのだ。

「この世で最もいい」

「最もだな」

「そうだ。実にいい」

「私もそう思う」

二人の考え、そして舌もだ。それは一致していた。フランスのものならばだ。彼等は純粹に愛する、そういうことなのだった。

食事をしながら

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4191v/>

食事をしながら

2011年8月2日03時29分発行